

1 意味と文法パターンの関連性

英語（あるいは他の言語でも）を学んでいくうち、学習者は遅かれ早かれ、その言語において作り出された**意味と文法パターンに関連性がある**ことに気づくようになります。

具体的な例をあげると、好き嫌いを表す動詞の後には別の動詞の～ing 形が続くことがよくあります。

- I **like** studying English.
「私は英語を勉強するのが好きだ」
- I **enjoyed** playing tennis yesterday.
「私は昨日テニスをして楽しんだ」
- John **dislikes** watching horror movies on television.
「ジョンはテレビでホラー映画を観るのが嫌いだ」
- Some people really **hate** getting up early in the morning.
「朝早く起きるのが本当に嫌な人もいる」

以下の動詞は「+～ing」のパターンではありませんが、これらがすべてパーティクル at を伴う「伝達」動詞であり、すべてタイプ③の句動詞であるという点で、文法と意味との関連性を示しています。以下の at は「標的を定める」意味 (p.040) に関わります。

- cry **at** it 「そのことで泣く」
- sigh **at** it 「そのことでため息をつく」
- laugh **at** her 「彼女を笑う」
- smile **at** him 「彼に微笑みかける」
- frown **at** them 「彼らに眉をひそめる」

文法は言語において意味を生み出していると言えます。逆に、そ

の意味は言語の文法に反映されているとも言えます。この章で取り上げる動詞は「+～ing」というパターンをもつ句動詞の例です。

これらは次の4つの意味グループに分けることができます。

- 「説得すること」に関わる動詞
- 「思いとどまらせること」に関わる動詞
- 「続けること」に関わる動詞
- 「やめること」に関わる動詞

2 説得すること (“into +～ing”のパターン)

句動詞において具体的に示された意味をパーティクルがどのように反映しているかを理解することは難しくありません。talk me **into** における into とは、誰かに話しかけて合意の状態に入ること (talking to someone so that they enter into a state of agreement) を意味します。第3章で指摘したように、in は「比喩的な (または文字通りでない) 囲い」に関連付けることができます。したがって、何かをするように説得するために誰かに話すことは、その誰かが特定の囲いに入るために話すこととして言語に反映されます。さらに、それに to の「方向性」が加わります。

要するに、「説得すること」に関わる句動詞は、“into +～ing”のパターンをとることが多いのです。

以下、私は説得に関わる句動詞をさまざまな種類に分類しました。

▶ 中立的

- We **talked** her **into** accepting our proposal.
「私たちの提案を受け入れるよう彼女を説得した」
- She tried to **coax** me **into** going to that dangerous place.
「彼女は私をなだめてその危険な場所に行かせようとした」